

Webを用いたコンテンツの高齢者住民見守り組織活動の充実支援および地域看護学教材としての効果 ～認知症高齢者の見守りに焦点を当てて～

梶田 聖子 甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科 講師

はじめに

高齢化率の進展に伴い、高齢者が地域で住み続けることができるよう、地域での高齢者見守りが課題となっている。高齢者の地域見守り組織活動については、民生委員・見守りボランティアを中心とする地域見守り組織メンバーによる挨拶・声かけ等、日常生活の中での見守りが支援を必要とする高齢者の早期発見に貢献している。しかし、高齢者見守りの中心となる民生委員・見守りボランティアのなり手がなく、後継者育成が課題となっている。同時に、現在の地域見守り組織メンバーの活動支援を行う必要がある。

そこで今回、地域における高齢者見守りの後継者育成を行うため継者育成の対象として、一般市民を対象とする教育方法を検討する。一般市民の生活は多様で、従来の集合形式の研修では、研修を受講できる人は、職を持たない人や自営業など限られた人になる。そのため、集合研修に加えて、Webによる教材学習を取り入れることで、啓発教育の対象を広げ、効果を高めることができると考える。学習の効果を高めるためには、具体的かつ身近な例を用いて学ぶ必要があり、現在、徘徊による行方不明が問題となっている「認知症」に焦点をあてた。認知症は、症状が理解されないために、介護負担の増大や虐待の要因となっていることから、認知症に対する正しい理解をもち、適切な対応ができるよう、若い年代から啓発教育を行い、将来の見守り手を育成する必要がある。現在、認知症サポーター養成講座が小中学生から高齢者まで幅広い年代で行われている。

2008年に改訂された小学校の学習指導要領では、「集団の一員としてよりよい生活づくりに参画する態度の育成を特に重視」などが盛り込まれ、学んだことを地域の生活で実践できる力の育成が望まれている。認知症高齢者への対応力を育成することは、今後ますます認知高齢者が増加し、民生委員等、地域づくりの担い手が後継者不足である中、地域の実情に沿った認知症高齢者の見守りの担い手を育成する上で不可欠である。

近年、学習効果を高める教育方法として、対面授業や集合研修とeラーニングを組み合わせた教育方法が導入されている。従来型の対面式の学習は、学習者の発言や態度から理解度を把握でき、リアルタイムで質問に対応できるなどの利点がある。しかし、臨場感に乏しく、学習者のイメージ化を図ることは難しい。学習意欲の向上や学習効果を上げるためには、eラーニングを含めた研修形態の多様化が必要である。今回、タブレットによって、手元で画像などを通して臨場感を伝え、学習者の認知症高齢者の生活に対するイメージ化を図る。また、学習者同士の意見交換や教え合って学びの共有を行うことは、児童・保護者の学習意欲および学習効果を高める効果が期待できる。

そこで、今回、近年中にタブレット端末導入を検討しているO市Y区A小学校に通う5年生とその保護者を対象として、タブレットを使用した認知症啓発教育を行い、認知症高齢者の見守り実践力を養うことは、今後の高齢者見守りの人材を育て、現在の見守り組織メンバーの負担軽減につながる。また、作成した教材は、看護学生への教育教材として活用が可能であると考えられる。

目的

地域における高齢者の住民見守り組織活動の充実支援をするためのWebを用いた教材を作成し、その活用可能性を検討する。また、看護学生の地域看護学学習資料としての活用可能性も併せて検討する。

方法

1) 対象者：

(1)A小学校 校区の地区概要と対象者

人口 7700 人、高齢化率 16.6%、年少人口 6.1%、世帯数 5,500 世帯、社宅・集合住宅が多い。A小学校区の中にある集合住宅では、部分的に高齢人口が 50%を超える地区が存在し、独居高齢者や高齢者夫婦のみの世帯が増加している。その反面、昼間の人口流入は、3000以上の商業施設・教育施設に 40,000人が働き、3,000人が学んでおり、昼間人口が多い特徴がある。

地域コミュニティは、自主防災活動や防犯活動が活発に行われている。少子・高齢化が進み、

独居高齢者・高齢夫婦のみの世帯が増加する中、高齢者世帯の見守りに対する関心が高まっているが、高齢者世帯を支援するボランティアが不足している状況にある。A 小学校区は、少子化のため、児童数が減少しているが、PTA が中心となり、民生・児童委員、自治会会員と協力して、小学校を地域づくりの拠点として発展させる活動が活発に行われている。

2012 年 3 月に地域福祉アクションプラン推進委員会・キャラバンメイト連絡会・社会福祉施設連絡会によって、「小学生認知症サポーター養成講座テキスト」が発行された。しかし、テキストは実際に使われることのないまま、現在に至っている。PTA 関係者、民生・児童委員、自治会役員等の共通課題として、認知症高齢者を見守りが挙げられていた。

このような状況の中、高齢者の地域見守りを考える機会として、地域のニーズがあり、テキスト準備ができていない認知症高齢者に焦点をあてた。高齢者を見守り考える上で、抽象思考が可能となる小学 5～6 年生を対象とした。小学生高学年生と保護者を同時に対象とすることで、児童の認知症高齢者および見守り活動への理解を深めることが期待できると考える。

対象となる小学校区は、O 市 Y 区 A 小学校 5～6 年生とその保護者とした。

(2)B 大学看護学科 2 年生のカリキュラムと対象

B 大学看護学科では、2 年生に地域保健で活躍する保健師が活動技術・技法を学ぶ科目として、「地域看護学方法論 I」という科目が位置づけられている。本学の保健師課程科目履修は選択制であり、「地域看護学方法論 I」は、学生にとって、保健師課程科目選択を考える上で大切な科目である。しかし、高齢者への具体的ケアを学ぶ科目は 3 年生であるため、2 年生で高齢者保健活動の技術・技法を学ぶには、高齢者の対象理解をする中でポイントとなる認知症の理解が不可欠である。87 名の学生を対象に一度にしかも限られた時間で認知症の理解を深めるためには、視覚的に効率よく認知症のイメージを持てる教材学習が必要であった。

2) 期間：

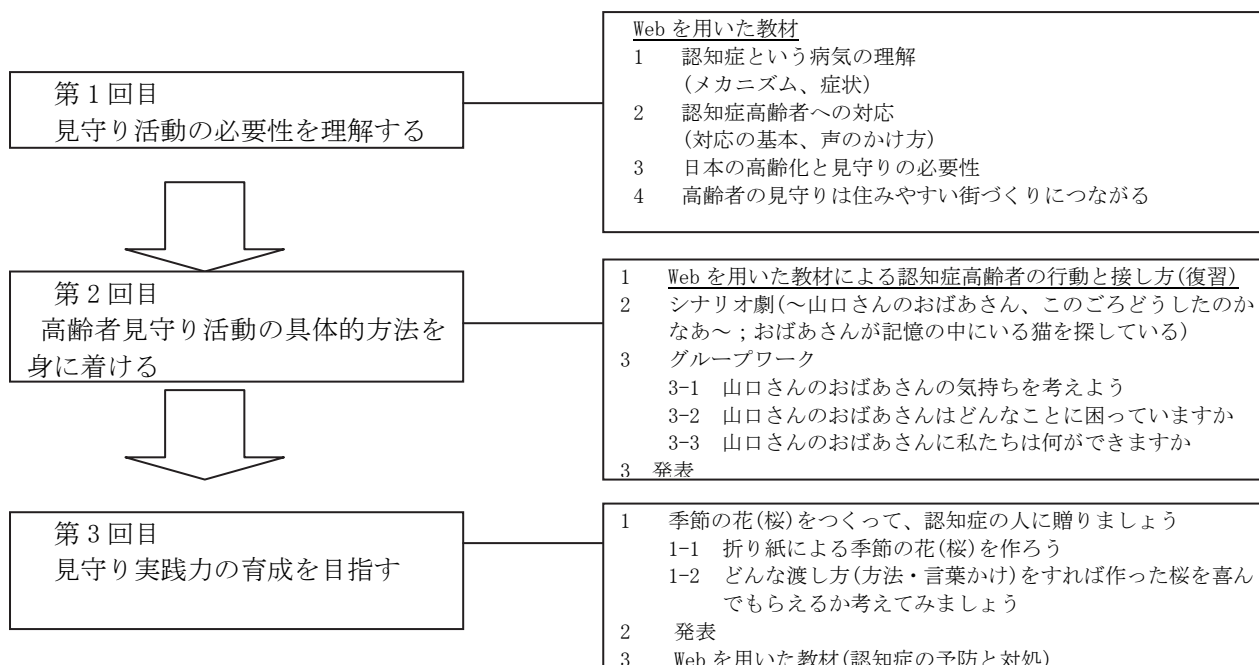
(1)A 小学校 2014 年 1 月 11 日、2 月 22 日、3 月 8 日 計 3 回

(2)B 大学看護学科 2 年生 2013 年 10 月 24 日(木) 13～16 時 10 分

3) プログラム

(1)プログラムの概要

目標：第 1～3 回目をとおして、高齢者を見守り活動実践力を養う



(2)教材内容

図 1 プログラムの概要

事前の打ち合わせで、地区で高齢者を見守りをしている民生委員・児童委員より、「大人でも認知症のことについて、詳しい話を聞いたことがない人が殆どであるので、児童と保護者を一緒に聞かせてほしい」

との要望があった。そのことから、内容は、「小学校高学年がわかる」内容を目指した。

Web教材の使い方については、PTA代表者より、「知識の理解をする学習で利用してほしい」との要望があった。Webを用いた教材は、視覚的にインパクトを与え、イメージ化を促すことが期待できる。しかし、実践力の育成につなげるためには、身近な事例を用いたグループワークや具体的に実践する方法を考え、発表をすることが必要であると考えた。そのため、今回、認知症を理解する部分にWebを用いた教材を用いた。

教材の主な内容は、「認知症という病気の説明(メカニズム・症状)」、「認知症高齢者への対応(対応の基本、声のかけ方)」、「日本の高齢化と見守りの必要性」、「高齢者の見守りは住みやすい街づくりにつながる」とした。

作成は、Microsoft PowerPoint2010 で作成し、Adobe Captivate5.5 で作成し、Flash Player で閲覧できるようにした(図2)。作成した教材は、PTA関係者に集会の際、プレテストで確認してもらった。3回シリーズのプログラムとなるために、各回の終わりには、次の参加を促すために「次に何をするのか」を伝えるスライド作成の要請があり、作成した。Web作成は、Adobe DreamweaverCS6 を使用した。サーバは、ケーブルのホームページアドレスを利用した。看護学生へのプレテストは、3年生は看護学実習の時期が早まり協力が難しかったこと、2年生の時間割も過密であり、プレテストの協力が難しかった。

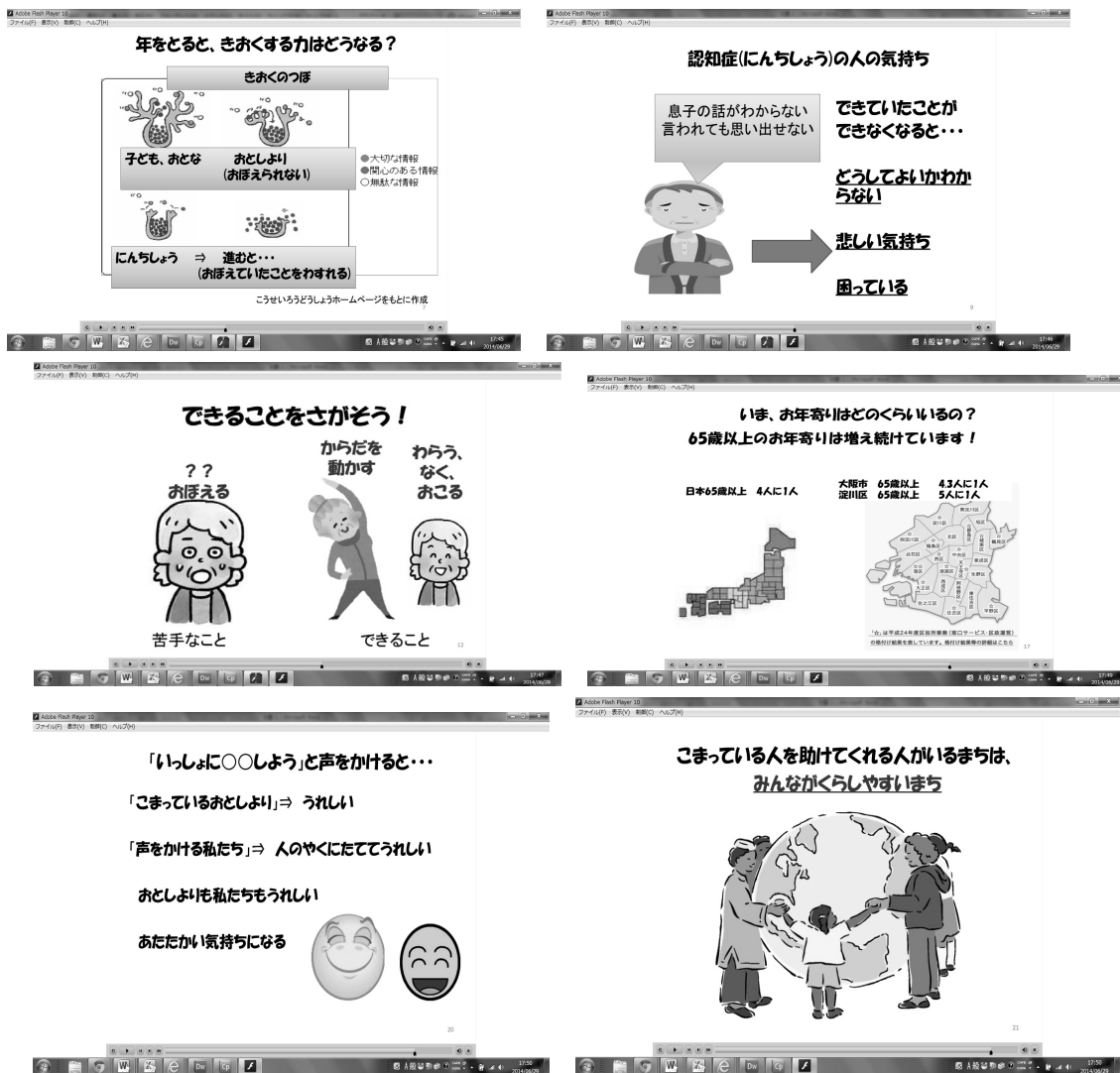


図2 作成した教材(抜粋)

2回目の事例は、小学生の身近にいる近所のおばあさんを想定したシナリオを作成した。3回目は、PTA代表者より、「参加者に楽しみながら、認知症高齢者に対する接し方を考えてもらいたい」とのことから、

小学生に人気のある折り紙を使った花づくりを取り入れたいとの提案があり、プログラムに反映した。

5) 倫理的配慮

本研究は、甲南女子大学研究倫理委員会に申請し、承認を得た。

(1) 研究協力の依頼に関する配慮

①A 小学校校長・学年担当教員への研究協力依頼

A 小学校の教育責任者である校長に対して、口頭および文書で研究の趣旨・研究方法・倫理的配慮を説明し、承諾を得た上で研究協力を得る。

②A 小学校 PTA 関係者への研究協力依頼

A 小学校 PTA 会長に対して、口頭および文書で研究の趣旨・研究方法・倫理的配慮を説明し、承諾を得た上で研究協力を得る。

③児童と保護者への研究協力依頼

①プリントの配布時、アンケート協力依頼を記載する。

②当日、文書および口頭で説明し、アンケート協力依頼を行う。研究協力の承諾は、アンケートの記入・提出によって同意を得たこととする。アンケート協力は、自由意志であり、協力しなくとも、児童および保護者にとって不利益をこうむることはない旨、説明する。

④看護学科 2 回生に対する配慮

感想カードは、出欠確認に使用するが、内容に関して、成績面で原点となることはない旨伝えた。

(2) 教育面における倫理的配慮

児童の教育面では、身近な人に認知症が発症する可能性について十分な理解を促し、認知症高齢者に対する偏見が生じないよう、事例の用い方には十分留意する。

(3) アンケートデータや感想カード内容の取り扱い

得られたデータは、個人が特定できないよう、統計処理を行う。保存は、施錠できる場所へ保管する。研究終了後、回収した用紙はシュレッダー処理を行う。

結 果

1 A 小学校におけるプログラム

1) 参加者：参加者は、原則、3 回すべての参加を呼びかけた。

1 回目：小学校 4~6 年の児童および大人(保護者と PTA 役員、民生児童委員、区役所福祉担当者等)
計 36 人

2 回目：小学 4~6 年生、低学年の児童および大人(保護者と PTA 役員、民生児童委員等)計 32 人

3 回目：小学 4~6 年生、低学年の児童および大人(保護者と PTA 役員、民生児童委員等)
計 26 人

2) アンケート

第 1~3 回の勉強会の感想と理解したことについては、90%前後が肯定的な回答であった(図 1~5、図 7)。

「認知症の人への手助けができますか」は、89%が「できる」、「まあできる」と答えたが、「認知症の人に声かけできますか」は、「できる」「まあできる」が 77%にとどまった。

「シナリオ劇は楽しく学べましたか」については、「楽しく学べた」「まあ楽しく学べて」が 96%であった。

「研修会にタブレットを導入することについて」は、88%の人が「よい」と答えた。

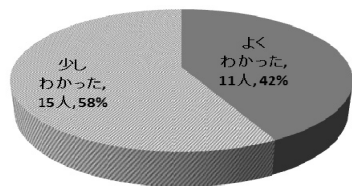


図1 認知症の人の行動についてわかりましたか(n=26)

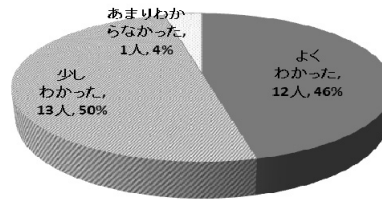


図2 認知症のひとの気持ちについてわかりましたか (n=26)

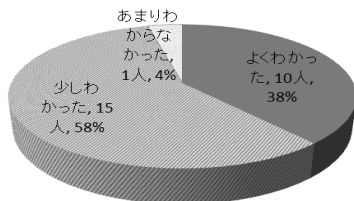


図3 認知症の人への接し方がわかりましたか (n=26)

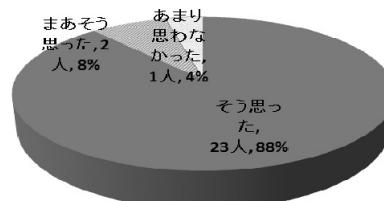


図4 認知症の人を見守ることが大切だと思いますか (n=26)

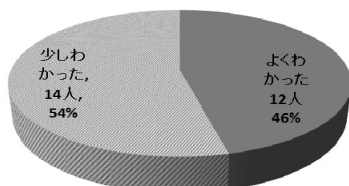


図5 認知症の人の家族の気持ちがわかりましたか (n=26)

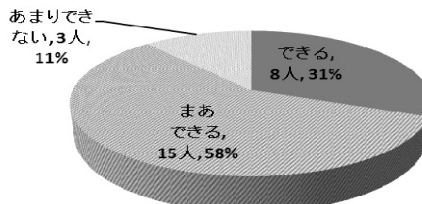


図6 認知症の人への手助けができますか (n=26)

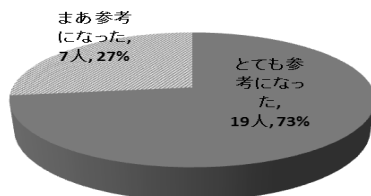


図7 他のグループの発表を聞いて、認知症の人への声かけが参考になりましたか(n=26)

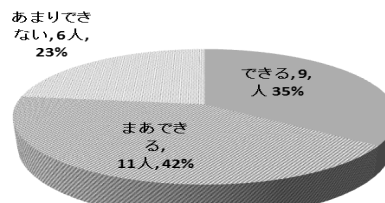


図8 認知症の人に声かけできますか (n=26)

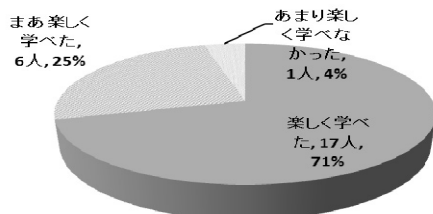


図9 シナリオ劇は楽しく学べましたか (n=26)

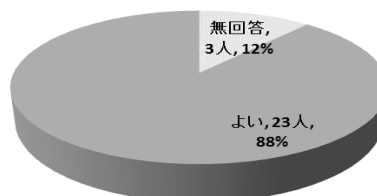


図10 研修会にタブレットを導入することについて (n=26)

Web教材は、1回目に参加者より、「認知症の人にどう話しかけたら良いか、声をかけやすいしくみをしたい」、「認知症の人に言うてはいけないことばを知りたい」との要望があった。そのため、2回目シナリオ劇とグループワークをする前に、「認知症高齢者の症状と行動」、「認知症高齢者への対応」について教材を作成し、2回目の研修でシナリオ劇の前に教材による復習をすることで、シナリオ劇を題材としたグループワークに活かす

るようにした。3 回目のグループワークと発表後、「認知症の予防と対処」について作成した教材を使い、参加者の知りたい内容に対応した。

2 B 大学看護学科 2 回生

対象は、看護学科 2 回生後期 Semester で必修科目「公衆衛生看護学方法論 I 高齢者保健活動」の単元を受講した 87 名であった。

高齢者保健活動の単元は、90 分授業 2 コマと限られた時間であり、我が国の高齢者割合の推移と健康状態、高齢者保健施策、介護保険等の制度を説明する時間 100 分、高齢者見守り活動の実践力育成を目指す内容 60 分程度の時間を使用した。学んだことは、出席カードを兼ねる感想カードに記入して提出してもらった。

3 Web を用いた教材での学び

今回、A 小学校では、タブレット導入時期が未定であったこと、看護学生には、授業の機会での教材使用となったことから、集合形式で教材を使用した。

Web を用いた教材から学んだことについて、A 小学校でのプログラム参加者と B 大学看護学科 2 年生の学びの内容を表に示した(表 1~3)。「認知症のある高齢者の気持ちについて」は、双方の対象者ともに、「寂しい」、「昔のことは覚えている」としていた。A 小学校の参加者の方では、「困っている」、「怖い」、「悲しい」、「イライラする」とあげていた。B 大学看護学科 2 年生では、「励ましてほしい」、「頑張りたい」とあげていた(表 1)。

「認知症のある高齢者が困っていること」については、双方の対象者ともに「他人に言われたことがわからない」は共通していた。A 小学校の参加者は、「日常生活がきちんとできていない」ことをあげていた。B 大学看護学科 2 年生では、「薬を飲み忘れる」、「道具の使い方がわからない」ことをあげていた(表 2)。「自分たちができること」としては、双方の対象者ともに、「話をきく」、「話を否定しない」ことをあげていた。A 小学校の参加者は、「見かけたら挨拶・声かけする」、「様子がおかしいとおもったら声をかける」、「家事を手伝う」、「自分たちでできなかつたら、近所の大人に知らせる」ことをあげていた。B 大学看護学科 2 年生では、「高齢者が理解できるように話す」、「スキンシップ」の他、「近所づきあい」、「近所の人に認知症の理解を深めてもらう」、「家族に社会資源の活用を促す」、「できることは高齢者にしてもらう(筋力低下予防、日常生活動作維持)」があげられていた(表 3)。

A小学校の参加者(小学生・保護者・民生・児童委員) n=36	B大学看護学科 2年生 n=87
・寂しい	・寂しい
・困っている	・大事な人・動物がいなくなったことが認められない
・昔のことは覚えている	・励ましてほしい
・怖い	・頑張りたい
・悲しい	・心の支えが欲しい
・イライラする	

A小学校の参加者(小学生・保護者・民生・児童委員) n=36	B大学看護学科 2年生 n=87
・他の人に言われたことが分からない	・今と昔が混同
・日常生活がきちんとできない(洗濯・金銭管理・掃除・買い物)	・他人に言われたことが分からない
・毎日同じ服を着ている、数字が分からない・人の名前が憶えられない・習ったことや近所の人を忘れる・思い出せない	・薬を飲み忘れる
・お風呂に入っていない・新聞がたまる)	・道具の使い方が分からない

表3 自分たちができること	
A小学校の参加者(小学生・保護者・民生・児童委員) n=36	B大学看護学科 2年生 n=87
・一緒にさがしている猫を探す	・言動を否定しない
・見かけたら挨拶・声をかける	・ひとりでの時間を長くしない
・様子がおかしいと思ったら声をかける	・話を聴く
・話を聞いてあげる(困っていることや昔のこと)	・道具の使い方を書いて貼っておく
・話を否定しない	・ヒントを与えながら、高齢者が理解できるように話す
・お手伝いをする	・笑顔で接する
・自分たちができなかつたら、近所の大人に知らせる	・写真などで昔の出来事を共有する
・家事を手伝う	・高齢者が理解できるよう短く簡潔に話す
	・スキンシップ(手を握る、体に触れる)
	・近所づきあい(必要なとき、助けてくれる)
	・近所の人に認知症の理解を深めてもらうよう伝える
	・できることは高齢者にしてもらう(筋力低下予防・日常生活動作維持)
	・家族に社会資源活用を促す(介護保険制度、相談窓口紹介)

考 察

1 A 小学校における Web を用いた教材によるプログラムの効果

A 小学校区でも高齢者の見守りが課題となっていたものの、小学生と保護者の若い世代では、関わる機会の少ない状況の中、今回の研修プログラムは、地域のニーズに沿ったものであったと考える。地域のニーズにあった時期・テーマであったため、開催日程が土曜日で参加者は限られたものの、1 回目の参加者 36 人中、26 人(72%)が 3 回目まで参加していたと考えられる。

参加者は、研修をとおして、「認知症の人の行動・気持ち」を考え、見守りを行う必要性を理解することができた。隣人の立場から、近接性と日常性を鍵とした見守りが期待されている(野崎,2014)。近接性と日常性を鍵とした見守りは、専門職では難しい。参加した児童は、自分たちができることとして、同じ地域に住む隣人の立場から、挨拶や声かけができること、様子がおかしかったら、近所の大人に知らせるなど、具体的かつ実現可能な見守り方法を導き出していた。このことは、以前の日本では、高齢者と子ども双方に効果的な交流は、日常的な交流である(林谷ら,2012)、以前の日本で行われていた近所づきあいのような近隣との関係が高齢者の見守りには不可欠である。

しかし、小学生と保護者にとって、高齢者との接点は少ないと考えられる。現在直接の付き合いが無くても、日々の暮らしぶりから高齢であったり、独居であったりすることで困っているようなことが想像される(野崎,2014)。グループワークの際、「困っていること」について、日常生活で家事ができないことをあげ、「自分たちができること」として、「家事を手伝う」としていた。また、自分で手伝うことができない状況の時には、「大人に知らせる」と、次の対処につなげて考えていた。認知症のインフォーマルサポートとして、家族以外のインフォーマルサポートが十分に活用されていない可能性があり(伊藤ら,2014)、今後の高齢者地域見守り活動を支える人材を育成するために、小学生と保護者を対象に「認知症高齢者」の気持ちや行動についての啓発は、誰もが住みやすいまちづくりのために必要と考える。

Web を用いた教材の効果として、1 回目の教材は、参加者の認知症高齢者の見守りに関心をもつことにつながり、症状・行動や対処方法等の知識の習得に効果があったと考える。2 回目の教材で 1 回目に学んだ内容を復習することで、グループワークで「自分ができること」についての思考力・判断力を広げることにつながったと考える。

3 回目の教材「認知症の予防と対処」については、今回、参加者の声を聴くことができなかったため、今後、PTA 関係者より、意見を聴く必要がある。

本プログラムの学習成果を考える上で、Web を用いた教材以外の要因としては、今回、保護者が一緒にグループワークを行うことで、児童の思考力を広げ、深めるための手助けになった。児童の思考力の広がり・深まりから、地域における見守りまで目を向けることができたことから、今回は、児童と保護者が同時に研修に参加したことは意義があったと考える。

次のプログラムに向け、Web を用いた教材の効果を考えるにあたり、児童と保護者で教材の内容について同じ内容で伝える部分と、別の内容で伝える部分について検討している。

プログラムの形態については、今回のような集合形式で、Web を用いた教材学習を行った場合、Web を用いた教材についての効果をみることは難しい。そのため、Web を用いた教材の効果を検討する評価指標が必要であると考え。今年度秋から来年度にかけ、2人1台にタブレットを用いて研修を行う予定である。

2 B 大学看護学科 2 年生の Web を用いた教材による授業の効果

B 大学看護学科 2 年生の「公衆衛生看護学方法論 I 高齢者保健活動」の 2 コマの中で、我が国の高齢者割合の推移と健康状態、高齢者保健施策、介護保険等の制度を説明したのち、教室でプロジェクターに投影して、Web を用いた教材学習を行った。説明の直後に Web を用いた教材を使用したことで、認知症高齢者の症状や行動を理解したうえで、専門職としての視点から認知症高齢者への接し方や家族への支援、近隣による見守り活動支援の必要性について考察できたと考える。

今回の Web を用いた教材については、A 小学校の研修に参加した一般市民と看護学生では、同じ教材でも学びが異なっていた。このことは、役割や立場の違いによると考える。一人の認知症高齢者を近隣と専門職が協働して支えるため、それぞれの役割を考える上で役立てることが可能である。

結 論

1 Web を用いた教材の効果

- 1) A 小学校の参加者は、認知症に関する関心をもつことができた。
- 2) A 小学校の参加者は、認知症高齢者の気持ちや行動、接し方の知識を得ることができた。
- 3) 参加した児童が、高齢者地域見守り活動として挨拶や声かけができることを学んだ。
- 4) 参加者アンケートから、「認知症高齢者に声かけができる」77%に留まった。
「声かけできる自信」をつけるには、シミュレーション教材やクイズ教材を追加し、楽しみながら繰り返し学べる教材へと充実を図る必要がある。
- 5) 地域看護学教材としての活用は、看護学生が認知症高齢者と家族に対して、社会資源・制度活用を勧める等、専門職として行うべき支援について考察することができた。
- 6) 看護学生は、認知症高齢者と家族が地域で生活できるためには、地域見守り活動(近所づきあいや隣人による声かけや挨拶、気に掛ける)によって、見守りを行っていくことが重要であることを学んだ。

2 課題

- 1) Web を用いた教材の閲覧方法として、タブレット等を用いて、手元で操作しながら学ぶことで学習意欲の向上、学習効果の向上が期待できると考える。
- 2) A 小学校で小学高学年児童と保護者を対象としたが、児童と保護者の教材内容について、同じ内容が望ましい項目と異なった内容が望ましい項目を検討する必要がある。
- 3) Web を用いた教材は、個別で学習するための教材とするのか、集合研修の中の一部を使用するのか検討を重ねることが必要である。
- 4) 今回、Web を用いた教材の診の学習効果を考えるには限界があり、今後、Web を用いた教材のみの効果を測定できる指標の検討が必要である。

【参考文献】

- 相馬恵子(2014): Face Time を利用した他校生徒との協働学習を取り入れた中学校理科の授業実践—科学的思考力・判断力および表現力に与える影響を中心に—, 理科教育学研究 Vol.54 No.3 (2014), p357-367
- 林谷啓美, 本庄美香(2012): 高齢者と子どもの日常交流に関する現状とありかた, 園田学園女子大学論文集, 第 46 号(2012), p69-87
- 伊藤美智子, 鈴木亮子, 伊藤大輔(2014): 認知症の人が活用しているインフォーマルサポートの種類と機能—認知症ケアマネジメントへの示唆—, 日本認知症ケア学会誌, 第 12 号第 4 号(2014), p731-741
- 金谷志子, 津村智恵子(2012): 地域高齢者が安全に生活できるための地域住民による高齢者見守り活動の特徴, 大阪市立大学看護学雑誌 第 8 巻(2012), p17-23

厚生労働省(2013):平成 24 年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく
対応状況等に関する調査結果

文部科学省:新学習指導要領 小学校学習指導要領, 第 5 章 総合的な学習の時間

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm, 2013 年 9 月 17 日閲覧

野崎端樹(2014):地域住民による高齢者の見守りへの支援—都内 S 町事例からみた資源と課題—,福祉社会開
発研究 6 号,p89-98

流石ゆり子,小山尚美,松村照美他(2010):高齢者支援組織を対象に実施した認知症ケア啓発研修の評価—A
町高齢者施設での認知症高齢者との『ふれ合い体験』を組み入れて—,山梨県立大学看護学部紀要,Vol.12
(2010),p29-40